

A decorative border with floral motifs at the corners and a vine-like pattern with leaves and small flowers along the edges.

本古典集成

落窪物語

稲賀敬二 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第一四回)
 おちくはものがたり
 落窪物語



定価一五〇〇円

昭和五十二年九月五日 印刷
 昭和五十二年九月十日 発行

校注者 稲賀敬二

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
 電話 東京 03 (二六六) 五一一一 (業務)
 東京 03 (二六六) 五四一一 (編集)
 振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
 組版 シーティエス大日本
 製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例	三
----	---

卷一	七
----	---

卷二	九五
----	----

卷三	一九
----	----

卷四	三七
----	----

解説	二九七
----	-----

付録	二九七
----	-----

本文校訂部分一覽表	三七
-----------	----

年立・付系図	三六
--------	----

凡 例

一、本書の本文は、柏亭^{はくてい}真直^{まなお}が延享三年（一七四六）書写した四冊本（広島大学文学部国語学国文学研究室蔵）を底本とした。

一、底本とした延享三年奥書本は、海北^{かいほう}若冲^{じやくちゆう}所持本を真直が借覽書写したものであって、若冲本に既に存した異本校合もそのまま朱墨で転記してある。底本校訂に際してはこの校合をも参看し、あわせて諸本をも比較した。読みやすいテキストの提供を志したが、底本の本文に即した読みを第一義とした。

一、底本は、春・夏・秋・冬の四季で巻名を分けているが、今、巻一―巻四の名称を用いた。

一、底本を改めた部分については巻末の「本文校訂部分一覧表」にかかげた。

一、校訂に当って、仮名を漢字に改め、漢字を仮名に改め、仮名づかいを正した。漢字は原則として現行の字体とした。また底本に朱記した句読点には必ずしも従わず、会話文には「」を付し、適宜改行して段落を示した。

一、注は傍注ならびに頭注による。現代語訳は傍注で、説明および和歌の解釈は頭注で、という原則に従ったが、説明の便宜上、必ずしもそのとおりには処理してない場合もある。

一、現代語訳は原文に即しつつ、自然な現代語になるよう意を用いた。

一、頭注は平易を旨とし、また現行の諸書の説を略号で引用した。参照した諸注釈書の略号は次のとおりである。

大成 『落窪物語大成』 中邨秋香 明治三十四年刊

全書 『落窪物語』 所 弘 『日本古典全書』 昭和二十六年刊

大系 『落窪物語』 松尾聡 『日本古典文学大系』 昭和三十二年刊

文庫 『落窪物語』 柿本奨 『角川文庫』 昭和四十六年刊

全集 『落窪物語』 三谷栄一 『日本古典文学全集』 昭和四十七年刊

一、巻末の「解説」は本作品の魅力を新しい視点から述べた。頭注に述べつくせぬ所を補足しつつ、おのずから全篇の構成・技巧・表現・作者などの要項を明らかにしようと思図したものである。

一、巻尾に「本文校訂部分一覧表」「年立・付系図」を添えた。

落窪物語

卷

一

一 今から見ればこれはもう昔のこととなったが。

* 時代をいつと定めず、漠然と昔の話として書き出すのは、平安朝の古物語の典型的な冒頭形式。

二 大臣・大納言に次ぐ身分。従三位相当。ここでは源忠頼をさす。二〇五頁九行目にその名が見える。物語では貴族を実名で呼ばず官名で記すのが通例。

三 長女を「大君」、次女を「中の君」 母のない姫君

三女は「三の君」のように呼ぶ。

四 寝殿造り（平安貴族邸宅の様式）の一部で、寝殿の東西あるいは北などに設けられ、寝殿とは廊・渡殿で連絡される。構造・規模は寝殿とは変りがない。

五 「裳」は、女子が腰の後ろに袴の上からつける装束。「裳着」は、男子の元服と同じで、女子の成人式。

六 特別大事にお世話なさる。「そし」（終止形「そす」）は、動詞について意味を強める。

七 「わかんどほり」ともいう。「王家統流」の字を当てる。ここは皇族の女性を母として生れた姫君、の意。一八一頁によれば、姫君の祖母が皇女。

八 上級の侍女。「枕草子」「源氏物語」などで「女房」の語が一般化するにつれて、この用例は激減する。

九 寝殿に付属する放出。「放出」は、母屋の一郭とも廂の間ともいふが明らかでない（一四四頁注二参照）。

二 間口が二間相当の部屋。「間」は、柱と柱との間。

二 「君達」は、貴人の子息・息女の敬称。「御方」は、貴婦人の尊称。

一 今 中納言と呼ばれる人で、
中納言なる人の、
むすめあまた持たまへるおはしき。大

君、中の君には婿取りして、西の対、東の対に、はなばなとして住

ませたてまつりたまふに、三、四の君に裳着せたまつりたまはむ

とて、かしづきそしたまふ。また、時々通ひたまひけるわかうどほ

り腹の君とて、母もなき御むすめおはす。北の方、心やいかがおは

しけむ、仕うまつる御達の数にだに思さず、寝殿の放出の、また一

間なる落窪なる所の、二間なるになむ住ませたまひける。君達とも

言はず、御方とは、まして言はせたまふべくもあらず。名をつけむ

とすれば、さすがに、おとどの思す心あるべしと、つつみたまひて、

「落窪の君と言へ」と宣へば、人々も、さ言ふ。おとども、ちこより

深い愛情をお抱きにならずにまいだったのだから、まして北の方の御ままたて、は

一年少の侍女。

二 こんなに冷遇されてはいるものの。

三 日増しにつらさばかりが
つる世の中に、物思いの限 姫君の才能とその日常

りを尽す我が身をどうすればよいのだろう。「憂さ」と「宇佐」(筑紫の地名)を、「心づくし」と「筑紫」を掛詞にした、縁語仕立ての歌。

四 下の「大方の心操さどくて」に並列的に続く。「さまでに」の下に「おはす」の省略を考える説(大成)、この物語に例の多い「て」止めの文体と見る説(文庫)がある。

五 「琴」は、絃楽器一般をいう。箏の琴(十三絃の琴)は母に習ったと次にあるから、ここは七絃の「琴」の類を意味する。琴は奏法が複雑で、正式に習わねば習得しにくいものであった。

六 誰がこの姫君に教えようか(教える人としてない)。反語。継母のもので、人並みの扱いをしてもらえない姫君なのだから、という気持を含む。

所もなく心細いことが多かった。すっかりした世話役もなくなきこと多かりけり。はかばかしき人もなく、乳母もなかりけり。

実母のご在世中から

ただ、親のおはしける時より使ひつけたる童のされたる女ぞ、後見とつけて使ひたまひける。あはれに思ひかはして、片時離れず。さ

〔姫君と童は〕しみじみと心を交わして

るは、この君のかたちは、かくかしづきたまふ御むすめなどにも劣

容貌

〔北の方が〕

はすまないのだが、人と交際することもないので、あるものとも知る人もなし。

成長して次第に分別がつくにつれて

やうやう物思ひ知るままに、世の中あはれに心憂きことをのみ思

されければ、かくのみぞうち嘆く。

三 日にそへて憂さのみまさる世の中に

心づくしの身をいかにせむ

と言ひて、いたう物思ひ知りたるさまにて、大方の心操さどくて、

世のはかなさを知り尽したさまで

とこころを賢くて

琴なども、習はす人あらば、いとよくしつべけれど、誰かは教へむ。

きと上手に習得するはずだが

大

母君の、六つ七つばかりにておはしけるに、習はし置いたまひける

実の母君が〔姫君の〕

ままに、箏の琴をよにをかしく弾きたまひければ、嫡妻腹の三郎君、

箏の琴に 関心が深いというので

十ばかりなるに、琴、心に入れたりとて、「これに習はせ」と北の

セしみじみとさびしく物思いにふけるさま。

ハ「ひねる」は、布のへりを内側に折り込み、糊をつけて縁をとること。「きぬひとへのみみをひねることなり」《河海抄》「いとつづくしくひねらせたまへば」《源氏物語》「手習の注」、「單は夏冬ともにひとへなるが故に、必ず端をひねるなり」《装束要領抄》とある。

九 いい傾向だわ。「よかるめり」の音便「よかんめり」の撥音無表記の形。

一〇 二人の婿の装束の注文が、いささかの暇もなく一時に姫君のところへ殺到して。「かきあひ」を掻き集めと解するのは、「あふ」が集まる意味の自動詞なので妥当ではない。

二 最初のうちしばらくは、忙しいとも感じたものの（果ては忙しいなどという程度を通り越して）。「しか」（過去の助動詞「き」の已然形）が助詞「ば」を伴わずに順接の意味に用いられた上代語法の残存とする説（大系）もある。

三 自分の仕事にしようというのでしょう。

三 近衛の少将（近衛府の大将・中将の下に位する。正五位下相当）で蔵人（蔵人所の職員）を兼ねた人。

四 多くの場合、こんな縫い物などの実用的な仕事をする人は少なかつたのだろうか。「多く」を上につけて読む説（文庫）もある。

方宣へば、^{〔姫君は〕}時々教ふ。

つくづくと暇^{いとま}のあるまゝに、物縫ふことを習ひければ、いとを^{上手に}か

しげにひねり縫ひたまひければ、^{〔北の方〕}「いとよかめり。ことなるか^{格別器量に恵まれてい}ほか

ない人は、^{実用的なことをまじめに}ものまめやかに習ひたるぞよき」とて、二人の婿の^{ふたり}

装束、いささかなる隙^{ひま}なく、かきあひ、縫はせたまへば、^二しばしこ

そ物いそがしかりしか、夜も寝^いもねず縫はす。いささかおそき時は、^{少しでも仕立てがおくれると}

「^{〔北の方〕}かばかりのことをだにも^{気が進まず大儀そうになさるとは}のうげにしたまふは。何を役にせむとな

らむ」と、責めたまへば、^{〔姫君は〕}うち嘆きて、「いかでなほ消えうせぬる

でもあれば
わざもがな」と嘆く。

「^{〔北の方〕}北の方は」
三の君に御裳着せたまつりたまひて、^{すぐに}やがて蔵人の少将あはせ

させ申し上げな^{大切にお世話なさる}さつて、いたはりたまふこと限りなし。落窪の君、ま^{今ま}

して暇なく苦しきことまさる。若くめでたき人は、^{美しい侍女は}多くかやうのま

めわざする人や少なかりけむ、^{姫君を難護しがちで}あなづりやすくて、いとわびしけれ

ば、うち泣きて縫^{縫いながら}ふまゝに、

一 この世に生きていたくないものだと思ふけれども、その願ひもかなわない、思うにまかせぬ命だこと。「わび人は憂き世の中に生けらじと思ふことさへかなはざりけり」(『拾遺集』雜上、源高明)と類想の歌(文庫)。

二 母在世中から仕える女の童^{わらわ}。 姫君の侍女あこき後に「あこき」と名づけられる。

三 髪^{かみ}の長いのは当時の女性美の要件であつた。

四 (当のあこきの氣持などおかまいなしに) どんどん召し出して使う。「ただ」は、ひたすらに、の意。

五 親戚の者。叔母(和泉の守の妻)が彼女を養女にしたがつてゐることが四四頁に見える。

六 お前の着物などが見苦しかったのに、(三の君に仕えてからきれいになつて) かえつてうれしいと思つてゐます。姫君は侍女に衣裳を与える經濟力もない。

七 姫君は何かと後見を大切に心をお掛けになることでしたので。「にてはべりければ」は、一本に「めでたければ」(すばらしいので)とある。地の文の「はべり」の用法はやや異例。語りの口調か(四四頁注九参照)。

八 北の方が姫君をお叱りになること。「さいなむ」は「罵」(呵)の字を当てる(『類聚名義抄』。上位の者の下位に対する言動であるが、尊敬語を伴わないのが普通)。

九 北の方の言葉。(後見も悪いが) 姫君も。「も」は並列の助詞。 あこきの夫小帶刀

世の中にいかであらじと思へども

かなはぬものは憂き身なりけり

後見^{うしろみ}といふは、髪長^{かみなが}くをかしげなれば、三の君のかたに、ただ召

しに召し出づ。後見いと本意^{ほんい}なく悲しと思ひて、「わが君に仕うま

つらむと思ひてこそ、親しき人の迎ふるにもまからざりつれ。何^{なに}の

よしにか、こと君取りはしたてまつらむ」と泣けば、君「なにか。

同じ所に住まむ限りは、同じことと見てむ。衣^{きぬ}などの見苦しかりつ

るに、なかなかうれしとなむ見る」と宣^{のたま}ふ。げにいたはりたまふこ

とにてはべりければ、あはれに心細げにておはするを、まもらへ習

ひて、いと心苦しければ、常に入り居^ゐれば、さいなむこと限りなし。

「落^お窪^{くぼ}の君も、これを今さへ呼びこめたまふこと」と、腹立たれた

まへば、心のどかに物語もせず。後見といふ名、いと便^{びん}なしとて、

あこきとつけたまふ。

かかるほどに、藏人の少将の御方なる小帶刀とて、たいそう氣転^{きま}の利く

「我子君」の意。「あてき」「いぬき」などと同類の女の童の呼び名。一般に「阿漕」(大成など)と表記されるのは当て字。

二 後に「惟成」とその名が見える。「帯刀」は、東宮御所の警備に当る舎人で、武芸に長じた者が選ばれた。「小」は、小男であったため(大成)とも、親も帯刀であったため(文庫)ともいわれる。

三 保護者の許しを得ずに娘を妻にすることを「盗む」という。

一三 左大将と申し上げた人のご子息で。「左大将」は、左近衛府の長官。従三位相当の官であるが、大納言や大臣が兼ねることが多かった。巻

二・一七〇頁に大臣昇進のことが 男主人公少将道頼見えるから、これも大納言の兼官であらう。

一四 右近の少将でいらっしゃる人を。物語の男主人公道頼をさす。七二頁には「左近の少将」とある。

一五 前に「あるものとも知る人もなし」(一〇頁五行目)とあった。未知の情報なので、道頼の関心も一層深くなる。

一六 「人間」は、人のいない時、の意。

一七 皇室の血をひく人の娘ということなのだね。「ななり」は、「なるなり」の音便。「なんなり」の撥音無表記の形。指定の助動詞に伝聞推定の助動詞「なり」がついた形。

一八 (同じ建物でも親とは) 離れて住んでもいるというじゃないか(忍び込むのにはおあつらえ向きだ)。

男が、このあこきに文通はして、年経て、いみじう思ひて住む。かたお互

みに隔てなく物語しけるついでに、この若君の御事を語りて、北の「あこきは」姫君

方の御心のあやしうて、あはれにて住ませたてまつりたまふこと、常軌を逸して、姫君を哀れな有様で

それにて、姫君のお氣立てや、ご容貌のすぐれていらっしゃる様子などを、「あこきは」

さるは、御心ばへ、御かたちのおはしますやうなど語る。うち泣き何とかして理想的な男性に

つつ、「いかで思ふやうならむ人に盗ませたてまつらむ」と、明け惜しいお方だのに

暮れ「あたらのもの」と言ひ思ふ。「乳母として」

この帯刀の女親は、左大将と聞えける御むすこ、右近の少将にて「道頼は」

おはしけるをなむ、養ひたてまつりける。まだ妻もおはせて、よき噂話をさせて 自分にふさわしい女性のことをお尋ねになる折

人のむすめなど、人に語らせて、人に問ひ聞きたまふついでに、帯刀が 身の上を

刀、落窪の君の上を語りきこえければ、少将耳とまりて、静かなる「道頼」

人間に、こまかに語らせて、「あはれ、いかに思ふらむ。さるは、どんなに悲しんでいることか

わかうどほり腹ななりかし。われに、かれ、みそかに逢はせよ」とその姫君を こっそりとあ

宣へば、「ただ今は、よにも思しかけたまはし。今、かくなむと、結婚のことなど念頭にもごいますまい そのうち こういうご意向

* 道頼と帯刀は乳兄弟の間柄なので、この時代の通例どおり、非常に親しく話を通じる。『源氏物語』の光源氏と惟光との主 道頼の意向と姫君の心境 従関係を通想させる。

なれば」と宣ふ。

〔道頼の意向を〕

〔あこき〕

帯刀、あこきに、かくなむと語れば、「今は、さやうのこと、か

しも

その上に〔道頼様は〕

けても思したらぬうちに、いみじき色好みと聞きたてまつりしもの

とりつくしまもなく答えるのを

を」と、もてはなれていらふるを、帯刀怨むれば、「よし、今御け

を伺ってみしよう

しき見む」と言ふ。

〔あこき〕姫君の部屋に続く

二間、

曹司には

この御方のつづきなる

恐れ多い

二間、

曹司には

得たりければ、同じやう

なる所はかたじけなしとて、落窪一間をしつらひてなむ臥しける。

八月朔日

ごろなるべし、

君ひとり

臥して

寝も寝られぬままに、

「母君、われを迎へたまへ。いとわびし」と言ひつつ、

われにつゆあはれをかけば立ちかへり

ともにを消えよ憂き離れなむ

ほんの気休めで

心慰めに、いとかひなし。

つとめて、物語してのついでに、「これが、かく申すは、いかが

しはべらむ。かくのみは、いかがはし果てさせたまはむ」と言ふに、

このままでは どうして一生をお過しになれましようか

「あこき 帯刀が

翌朝 〔姫君と〕

「あこき 帯刀が

「あこき 帯刀が

「あこき 帯刀が

「あこき 帯刀が

「あこき 帯刀が

「あこき 帯刀が

「あこき 帯刀が

「あこき 帯刀が